

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

これまでのあらすじ

高校卒業後、大阪の大学に進学した私は当時、三重には無かったパチスロに出会った。スロットの知識ゼロで挑んだ初戦は初代ニューバルサーだった。目押しで止まると思っていたため、毎ゲームゆつくり時間をかけて狙っていた。その後システムを覚えパチスロにどっぷりはまっていた。

私が始めた頃はまさに技術介入時代への突入時期で、この頃登場する機種は軒並み目押し技術が必要なものが多かった。高度な技術さえ持っていれば、最低設定の1でも出率が100%を超えてしまつものも多く、またそれがあつたからこそ、惜しみなく練習し、毎ゲーム手を抜くなどなかった。その甲斐あって、その技術はみるみる向上し、ルールが止まつて見えるようになった。絶対的な技術は財布を潤し、普通のサラリーマンではなかなか稼げない額を毎月きっちり稼ぎ出していた。

しかし、技術者だけが得をする時代はそう長くは続かず、「獣王」が版図を拡大してきた頃に、スロットでの生活を引退する。

その後は普通に就職するが、スロットはやめられず、趣味程度で打っていた。そのとき、仕事ではなく、趣味で打つスロットの楽しさによりやく気づく。この楽しさを与えてくれるスロットのナカミはいったいどうなっているのだろうか。

か？ホールの経営状況や、設定状況はいつたいどんな感じなんだろう？このスロットの最後の疑問を解き明かすため、ホール店員として働く決意をする。

ナカミを知るといつ目的で入社したものの、その人間模様は多様でとても興味深かった。人の個性、そこから来る裏切りや迷走、落胆。人を知り、信を得て、使われ、使う。敵や味方。これらいろんなものを私は吸収し、人としてあるべき姿や裏の姿を知ろうと模索していった。

そして今まさにまた新たな裏切りに直面している。設定情報の漏洩、思いもよらないその犯人、どうやら裏で操る怪しい影がありそうだった。そしてそれは見覚えのある名前だった。

登場人物

K君：ホール従業員。当ホールでもヘランと言え。長い下積みからようやく班長に昇格したもの。今回の事件にて一般従業員に降格させられる。

U君：入社して数ヶ月で班長に昇格し、従業員にも頼られデキル班長だったが、店長と折り合いがつかず引退する。

Y君：最近昇格した新班長。礼儀正しさが印象強い好青年。

店長：当ホール店長。自分勝手に気風屋だがその真意はいまだつかぬ。

共犯

時刻は午後3時、そろそろ店長が出勤してくるだろうという時間、従業員用出入り口を映す防犯カメラには、店長ではなくK君の姿があつた。間もなくして、彼は事務所に入ってきた。

「えらく早い出勤だな」
「はい、通帳を記入して持つて来ました」

「ああ、例の件か、店長も間もなく来るだろう。そのへんに座つて待つていてくれ」

そう言いながら、通帳を受け取り中を確認する。数回の振込みがあり、それぞれそれほど大きな額ではない。ふと振込み名を見ると、そこには知っている名前が記帳されている。「○○○（U君の本来）」えっ……。その名

前に釘付けになっているちようどそのとき、事務所の扉が開き、店長が出動してきた。

「お、通帳もつてきたのか、見せてみる」

「こちらです、しかしこれは……」
「なんだ、それほど多額じゃないじゃないか」

「はい、しかし問題は振込み元です」
それを確認した店長も目を丸くしている。

「元うちの班長じゃねえか！」

「はい、まさかU君が絡んでいるとは思いませんでした。」

「まあいい、終わったものは仕方がない。おいK、今日は一日中お客さんに頭を下げていろ！」

「はい、わかりました」

そそくさと、事務所を後にしたK君は、メインの出入り口前にて1日中お客さんに頭を下げていた。どれだけホールが慌しく、忙しくなつても、彼はその場を動かさずとせず、頭を下げて続けた。こんな姿をみていると、どうしてもUが上手くK君を操っていたとしか思えない。自分から何かをしようとする姿勢はK君にはない。今でさえ、普通ならホールのヘルプに行くだろう、しかし彼にその様子はまったく無く、それ以前に「ホールを助けたほうがいいのだろうか？」という疑問すらないのだと思う。

過去にあった店長の一件、U君がこういうことをやろうと思つたのもその件があつたからという可能性は高い。

虚言

この件以来、設定情報の管理はさらに厳格になった。私と店長以外は絶対に見ることも触ることもできない。閉店前に決められる設定は私が打ち込んだ時点で店長が家まで持つて帰る。私が休みの場合は店長が打ち込み、家まで持つて帰る。店長出勤時に設定表をもつてきて、それをパソコンに入力した時点でそれはシュレッダー行きだ。パソコンの閲覧方法は私と店長以外は知らない。

「これで、今度こういうことがあればお前が犯人だな！」

「いえ、店長かもしれませんよ」
連続の不祥事でお客さんからの信頼を徐々に失いつつある当ホール、信頼を回復して行くための方法は明白

翌日

いつも通りの早番での出勤だった私はそそくさと開店準備を進めていた。続々と出勤してくる従業員は口々に昨日の件の詳細を聞いてくる。遅番しか知らないことなのにすでに早番の耳にも入っていたようだ。こういう情報の伝達速度は、それこそ行列のできる店の評判より早い。いろんな意味でこういう事件を欲する性質が人にはある。慣れてしまった仕事には刺激がない。たまに発生する何らかの変化や事件がそれを潤す素材となる。その慣れた仕事があれば長いほどその素材の効果は絶大である。ちよつとしたくだらない素材であつたとしても、それは流行を凌駕してしまう。もうすでにお客さんの耳にも入っているだろう。

開店時間となり、扉が開かれた。入店してくるお客さんの中に例の若僧はいない。目的の台を確保したある若者が私に近づいてきて、

「班長、設定情報漏らしてたんやろ？俺にも教えてよ」

「その件がきっかけとなり、私すら設定情報は閲覧できなくなりまして。」

予想通りの質問だった。丁重にお断りするよりも、知らないと言つた方が楽だろうと、このように発言した。

この日は多数のお客さんに声をかけられた。もちろんその質問内容はすべて同じだった。

である、ならばそれを少しずつでも実行して行かなければならない。

しかしそれでもなお追い討ちをかけるように負の連鎖は続く。

ホールを巡回していると、常連のお客さんから声をかけられた。

「この台つて設定5なん？」

「さて、どうなんでしょうか。」

「またまたー、だって班長が教えてくれたよ」

「まさか、班長は設定を知りません。もちろん私もです」

「え、マジ？だって昨日は自分が設定入れたから間違いないと言つてたで……」

「ありえませんが、店長が設定を入れると決まっています。班長ごときが触れるものではありません。」

「あのヤロー、嘘つぽちかい！」

「班長の発言は虚言です。私から聞いてみます、情報ありがとうございます」

この班長の発言は100%嘘である。昨日設定を入れたのは私なのだ。なので私もお客さんに嘘をついた。ただどうしてもこのお客さんが嘘をついているとは思えない。その台は設定5でもなんでもない。はたしてこれはどういうことなのか。礼儀正しさに好感が持てた新班長のY君、彼もまた胡散臭い人物なのだろうか……。とりあえず少し探りをいれてみることにしよう。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。